

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 屋島南麓の社寺と古墳を訪ねる

講師 山元敏裕

(高松市文化財専門員)

平成21年3月15日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 おみややはちまんじんじや
大宮八幡神社

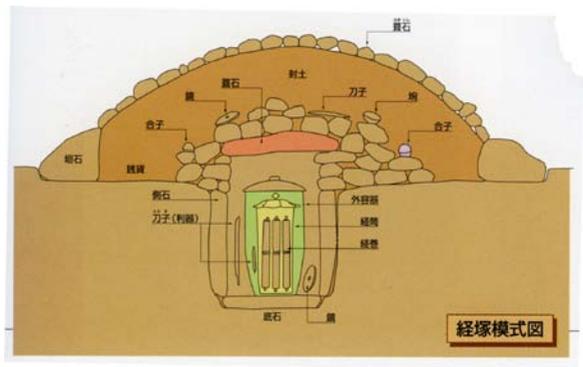
西暦八五九年（貞観元年）豊前の宇佐神宮より御船にて京都石清水八幡宮に御遷宮のおり、屋島沖の海上で激しい風波に遭遇し檀ノ浦の入り江に避難され御輿を陸地に遷御して奉り、三日間御鎮座される間に、風波も穏やかになり御船を出御の際、御鎮座の跡に神幣三振りを残されたのを里人等が氏神として奉祀することになりその場所に一間半四面の板葺きの社を建立して三振りの神幣を奉ることになったが、人家も少なく、氏子も乏しく、奉祀するのが困難となり現在の場所に新宮を築き遷し奉られ鎮座されたのが西暦一一六〇年頃と伝えられ、この地名を新馬場と称され、又、旧跡地は現在「宮の窪」と伝えられている。（大宮八幡神社御由緒より）



大 宮 八 幡 神 社

2 おおみやじんじやきょうづか
大宮神社経塚

大宮神社経塚は神社の境内から出土し、神社に保管されていたものです。経塚からは銅製経筒、経巻、青白磁合子ごうすが確認されています。この銅製経筒は火炎宝珠鈕ちゆうじゆをもち、八花形の傘蓋かさふたをかぶせ、傘のでっぱり部の中央に猪の目いのめが透かして入れられるなど、滝の宮経塚（徳島県美馬市）出土の経筒に共通性が認められます。また、県下において経巻が出土した例として新宮安楽寺跡経塚（坂出市府中町）から四巻分、富田経塚から三巻分見つかっただけで非常に貴重なものです。形態

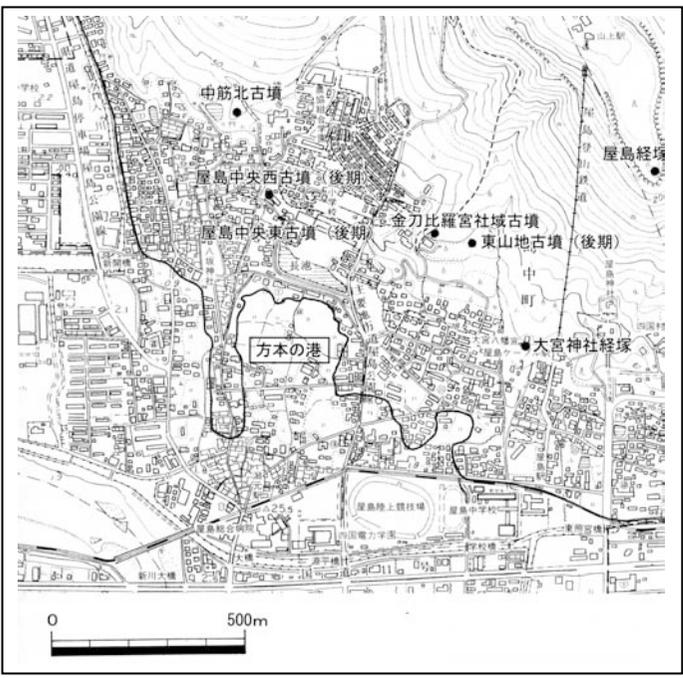


等から平安時代末から鎌倉時代初めのものであると考えられます。

経塚は、釈迦の入滅後、正法・象法・末法と世が移り、ついには仏教が衰滅してしまふという末法思想が広まった十一世紀の後半（平安時代後期）から経典を経筒に入れ、埋納する風習が盛んになりはじめたことによって造られるようになりました。末法の世を経て五十六億七千万年後に弥勒如来が再びこの世の救世主として現れる時までの経典の保存を本来の目的としていました。そのため、寺院や神社の境内地などで発見される場合が多いのです。

3 屋島南麓の古墳

かつて屋島の南麓斜面には、古墳が分布していましたが、その多くが、開墾や宅地開発によって壊され残っ



ていません。今回は現在残っている数少ない古墳を紹介します。

(1) ひがしやまじこふん
東山地古墳

東山地墓地の西側斜面に立地する直径約一〇mの規模をもつ古墳です。入口部分は土砂に埋もれていて一人がやっと通れる程の隙間しか無く、これまで正式な調査は行われていないので石室の規模等は不明ですが、石室石材の積み上げ状況から横穴式石室を主体部とし、東に向かって開口しています。古墳からの出土遺物は伝えられていませんが、石室の形態から古墳時代後期の古墳であると考えられます。



金刀比羅社域古墳

(2) ことひらしやいきこふん
金刀比羅社域古墳

屋島小学校の北東、四国電力高松荘の裏山にある金刀比羅社の小祠、東側約八mに

れる大谷川などの流域の水を受けて下流に広がる田地を潤すために築造されたもので、



東山地古墳

4 二つ池

(仲池・道池)

仲池 (通称長

池)・道池(通称新

池)をあわせて地

元では二つ池と

呼んでいます。屋

島山の南嶺を流

す。

立地する古墳です。蓋石ふたいしが取り除かれた主体部の箱式石棺が露出し、石棺の北半部には小祠を祀っています。箱式石棺の規模は、前述のとおり小祠が存在しているため、全体の大きさは不明ですが、全長約2m、幅○・四五mの規模であると想定されます。石棺の北半部上の小祠の台座石垣には、石棺の蓋石と思われる板石が使用されています。

宝曆（一七五一〜一七六三）年間に高松藩が編さんした「池泉合符録」には片元村の「仲池」「道池」と記されており、築造から二五〇年余りが経過していることがわかります。屋島の山麓には大小二〇〇余りのため池が存在しますが、仲池は昭和五十五年の一部が屋島小学校の校地として埋め立てられたものの、屋島山麓のため池の中では、最も大きい。両池は平成四〜七年にかけて改修工事が実施され、「憩いとふれあいの場」として堤防は遊歩道や休憩所が整備されるなど地元の方の憩いの場となっています。

5 地蔵寺じぞうじ（宝幢山延命院地蔵寺）ほうとうさんえんめいじんじぞうじ

屋島寺の末寺で行基菩薩が創建したと伝えられる寺で、創建当初は、現在の地よりも西にあったと伝えられています。本尊は地蔵菩薩。弘仁年間に空海が屋島寺を造営した時、修理をし「花蔵院」と称しました。その後、大破したので、文禄年中、良印という僧と山地刑部という人が、協同で相引川の北の方へ再建しました（旧大橋前の公民館の西）。その後、延宝年間に清澄という僧が現在地に移しました。かつて寺の参道脇には「亀の甲松」と呼ばれる樹齢二五〇〜二六〇年と想定される大木の並木があ

りました。また、一葉松と呼ばれる樹齢約三〇〇年といわれる黒松が境内にありました。この黒松は突然変異種で、葉が二枚合着し一本となったもので高松市の名木に指定されていました。平成四年秋に松喰虫で枯れてしまいました。

6 八坂神社

屋島西町が昔、西潟元村と呼ばれていたところに山田郡喜多郷に属していた村人は、木太村の郷社である八坂神社の氏子でした。西潟元村の氏子が、氏神である八坂神社へ参詣するには、春日川・新川という二本の大きな川を渡る必要があります。しばしば参詣できないため、木太村牛頭天王社ゴザテンノウシヤより勧進し、現在の場所に遷したのが、屋島の八坂神社の始まりです。木太村から勧進以来明治維新までは「天王はん」と呼ばれ崇められていたが、明治二年三月に八坂神社と改められ現在に至っています。



八 坂 神 社

秋季例大祭は古くは十月六・七日であつたが、現在は十月第一土曜日・日曜日に改められています。

【参考文献】

『太古の屋島（二〜四）』 文化屋島六〜八号

小竹一郎

『三社一寺のご案内一〜五』 文化屋島二十九〜三十三号

伊藤一男

『仲池・道池の改修成る』 文化屋島三十一号

中村律朗

『史跡天然記念物屋島・史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書』 2003・3

高松市教育委員会

